

地域と協同の研究センター NEWS

2026 年 1 月 25 日発行
257 号

第 22 回東海交流フォーラムが問いかける「新しい協同」へのひろがり

向井忍（地域と協同の研究センター 代表理事補佐）

2026 年 2 月 14 日（土）「第 22 回東海交流フォーラム」のテーマは「協同がひろがるまちづくり～私たちから、つながりをひろげて、地域をかえる～」です。ニュータウンや地方都市、中山間地域。これらの場所で静かに、しかし力強く芽吹いている「新しい協同」が紹介されます。フォーラムで報告される事例と、そこから浮かび上がる「希望」の輪郭を一足先にご紹介します。

■ なぜ今、「協同がひろがる」なのか（テーマ解題）

「協同」という言葉から何を思い浮かべるでしょうか。フォーラム実行委員会では、今ある「協同」の新たな広がりに着目しようと話し合いました。私たちが生活を守るためにつくってきた生協は「大きな協同」として欠かせない存在ですが、くらし・地域・社会は、時代とともに変化しています。個人の「困りごと」や「やりたいこと」を出発点に、小回りのきくボランティアやネットワーク（小さな協同）が各地で生まれています。

フォーラムが目指す「協同のひろがり」は、新しい組織を作ることではなく、既存の活動、何気ない日常のつながりを「地域資源」として見つめ直し、それをつなぎ直すプロセスそのものにあります。「協同」は遠い存在にある言葉ではなく、「地域資源そのもの」であること。私たち一人ひとりが、地域の「資源」であること。支援する側・される側という固定的な関係を超え、互いに活かす合う「市民性」の獲得を目指したいと考えています。

■ 4つの現場から聞こえる「再生」の足音——事例紹介

当日は、午前中の全体会と昼の交流タイムを通じて、岐阜、尾張、三河、三重の各地域懇談会が掘り起こした事例が報告されます。それぞれの「聴きどころ」を紹介します。

1. 岐阜：常識を軽やかに超える若者たち

岐阜県下呂市金山町で「のびのび養鶏場」を営むのは、IT 企業勤務を経て移住してきた 30 代の方です。アニマルウェルフェアの考えに基づいた平飼養鶏です。国産の餌にこだわり、手間暇をかけて育てた鶏の卵は 1 個 100 円。市場流通の価格競争とは一線を画す価値を提示し、それでも「買いたい」というファンを地域内外に広げています。

—「田舎暮らし」への憧れだけでない、自身の健康や生き方を見つめ直し、地域の人々と関わりながらも、独自のビジネスモデルをどう確立していけるのか。

—「若者が就農して将来やっていけるのか」という農の課題に対し、消費者やコミュニティの側はどのような答えを投げかけられるのか。



純国産鶏「もみじ」

のびのび養鶏場

2 月の日程など				
7 日（土）第 22 回東海交流フォーラム打合せ会				
13 日（金）社会的援護研究会				
14 日（土）第 22 回東海交流フォーラム				
18 日（水）常任理事会				
19 日（木）組合員理事ゼミナール第 9 回				
21 日（土）沖縄戦跡巡り報告会				
23 日（月）難民食料支援学び語り合う会				
25 日（水）三河地域懇談会世話人会				
28 日（土）生協職員マイスターコース第 7 回・修了式				
目次	第 22 回東海交流フォーラムが問いかける「新しい協同」へのひろがり	1	難民の方々からのメッセージと大学生の学び	4
	高蔵寺と犬山、二つの地域の今をささえる生協のつながり	3	情報クリップ 書籍紹介「普天を我が手に」	5 8
※第 22 回東海交流フォーラム開催については別紙ご案内でご確認ください				

—既存の枠組みにとらわれない新しい担い手が、地域にどのような化学反応を起こしているのか。「移住した若者がつなぐ」未来の形を考えます。

2. 尾張：変化する「ニュータウン」をつなぐ



高蔵寺まなびと交流センター
—グルッポふじとう

「日本三大ニュータウン」の一つ、高蔵寺ニュータウンでは、生協店舗が買い物の場所を超え、地域住民の「たまり場」となり、ケアの

拠点となっています。「春日井くらしたすけあいの会」や行政、大学などが連携し、ハード（建物）とソフト（人間関係）の両面からまちづくりを進めています。旧藤山台小学校を活用した施設「グルッポふじとう」での多世代交流や、移動販売車がつなぐ買い物支援のネットワーク。

—「自分たちがまちを作った」という自負を持つ世代が、今、どのように次世代へバトンを渡そうとしているのか。

—住民と専門職が連携した「たすけあい」の実践を、日本の全ての地域が直面する課題への処方箋にしてどう継続できるでしょうか。

（尾張地域懇談会の記事も参照ください）

3. 三河：「粋な老い支度」と平和への祈り



えざね協同ファーム
8 月 17 日の交流会

「食と農」をテーマに掲げる三河地域からは、地域に根ざした豊かな実践が報告されます。一つは、豊橋で「えざね協同ファーム」の実践、豊田市「わいわい農園」の見学、JA

ひまわりとの歴史ある提携からも学んでいます。農業者の高齢化や休耕地の増加に対し、生協と農協がいかに手を携え、地域農業を守ってきたのか。そこには長年の信頼関係という見えない「資源」があります。各務原市「八木山ささえあいの家」も見学しました。高齢男性たちが家の修理や特技を活かして「ささえあい」を行っている様子は「オーケストラのような役割分担」でした。

—地域で居場所を見つけ、生き生きと活動する姿は、「粋な老い支度」そのものです。

—食と農、そして平和。多様なテーマが「くらし」という一本の線でつながり、地域

の平和と豊かさを支えている三河の重層的な活動の広がりから学びましょう。

4. 三重：走るセーフティネット、移動販売車

三重からは、県境までの広いエリアを走る生協の移動販売車の事例が報告されます。コープまつさか店を拠点にスタートした移動販売は、商品を届けるだ



コープみえ
移動販売車

けではなく、担当者は、日々の会話を通じて利用者の体調変化や生活の困りごとを敏感に察知しています。些細な変化からの気づきを安否確認につなげる。毎週の訪問を楽しみに待つ高齢者にとって、担当者との会話そのものが孤独を癒やす時間となっています。行政や社会福祉協議会からも「早く来てほしい」と期待されたこの活動は、まさに地域の「見守り」インフラです。

—「おしゃべり」や「手間」を大切にする買い物という日常行為が、いざという時の防災やセーフティネットになり得ることを示しています。

—「最強のたすけあいのセーフティネットは地域のお祭りや近所づきあい」という言葉の実践編がここにあります。

■ あなたも「地域の資源」をみつけましょう

報告を聞くだけで終わらないのが東海交流フォーラムです。午後の分散会では「地域資源ってなに？」をテーマに、参加者で語ります。実行委員会では「協同とは何か。それは地域資源そのものであり、それを見つけること自体が協同を広げることだ」と話し合いました。キーパーソンとは「リーダー」のことではありません。おしゃべりが好きな人、力仕事が得意な人、あるいは「困っている」という声を上げられる人。そのすべてが、地域を動かす資源になり得ます。5 人程度の少人数グループに分かれ、報告された事例の中から「自分たちの地域でも活かせるヒント」を探ります。「私のまちでも、こんなことができるかもしれない」という小さな種を持ち帰っていただくための場所です。

昼食交流タイムには、リフレッシュ体操や「やなマルシェ」など協同の縁の紹介。活動紹介パネルの展示なども予定されています。お弁当を食べながら、地域を超えた仲間との交流も楽しんでください。

（むかい し のぶ）

高蔵寺と犬山、二つの地域の今をささえる生協のつながり

向井 忍(地域と協同の研究センター代表理事補佐)

2025 年度、尾張地域懇談会では 6 月に高蔵寺ニュータウンを見学し、10 月には「犬山協同のうまれるまちづくり交流会」を行いました。

■ 高蔵寺ニュータウン：課題先進地を支える「買い物」というライフライン

生協は「マイホームとして人々が押し寄せた新興住宅地で発展してきました。社会の未来を先取りする高齢化とコミュニティの変容に、生協・地域・行政がどのように向き合っているか探るため 6 月 23 日「日本三大ニュータウン」の一つ、高蔵寺を訪れました。ニュータウンを見学すると、統合した小学校跡を使ったコミュニティ拠点（グルッポふじとう）、健康・医療やケアの拠点（のきしたプレイス）ができ、丘陵地に若い世代向け戸建て住宅地（高森台）が開発され、近隣スーパーから出る移動販売車「道風くん」が団地の中の買



道風くん

物をささえる「血管」となっていました。

コープあいち高蔵寺ニュータウン店は、一昨年秋「おいしいお店・コープがひろがるお店・地域のお店」をコンセプトにリニューアルされました。「生協のお店はみんながやさしい。お店に来ると元気になる」と語る組合員（浜田さん、高山さん、澤井さん）の言葉のとおり、買い物ついでにおしゃべりをして孤独を癒やす「居場所」となっています。店舗 2 階では、高齢者サロン「美老（みろ）の会」が 20 年続いています。「春日井くらしたすけあいの会」は 1991 年のお店オープンと同時に発足しましたが、今ではグルッポふじとうにある地域包括支援センターにとっても、制度の狭間にある「困りごと」への依頼をする欠かせない存在です。お店を訪れた時、元めいきん生協理事の M さんが、創立期にニュータウンで「私たちが生協をつくった」N さんの手記を届けてくださいました。

■ 犬山：足元の「宝」を燃やす熱気と協同の力

10 月 29 日、コープあいち犬山店で「協同が生まれるまちづくり」交流会を開催しました。自然保護、温浴施設の存続、再生可能エネルギーに取り組む市民団体が顔を揃えました。「犬山再生可能エネルギー勉強会」の谷口さんは「犬山 ai エネルギー株式会社」を設

立し、地元の山で間伐された木材をチップにし、福祉施設へ熱（温水）を供給



犬山での交流会の様子

しています。「世間で言うバイオマスは、海外からヤシ殻を買ってくるが、我々は地元の資源でお湯を沸かす」と語り、息子さんと二人三脚で配管工事まで DIY で行っています。

「さら・さくらの湯」の存続を求める栗山氏の活動も興味深いものでした。行政は「市民利用が少ない」としていますが、「市外から人を呼べる資源」としての価値を訴え、コープグループ「すずらん」からは防災の観点から入浴施設の重要性が語られました。

生協の組合員活動が多様な市民活動をつなぐ「ハブ」として機能しており、生協の店舗やグループ活動を核にしつつ、そこから飛び出し、地域の自然やエネルギーといった「足元の資源」を循環させようとするダイナミックな動きを実感しました。

■ 「買い物」がつなぐ未来へのバトン

尾張地域懇談会の世話人会では、いずれの地域も、生協組合員による「買い物」という日常的な行為こそが、地域社会をつなぎ止めるインフラ（＝協同という資源）ではないかを話し合いました。高蔵寺では、店舗に来ることが社会参加の第一歩となり、そこから助け合いの輪が広がっていました。犬山では、店舗を活動の拠点としつつ、エネルギーや防災といったテーマで地域全体を巻き込んでいました。生協は、信頼できる商品（買い物）をとおして、高蔵寺では、人と人の隙間を埋める「ケアのインフラ」となり、犬山では地域資源を再発見し循環させる「ソーシャル・キャピタルの結節点」になっています。一方で、犬山のスズサイコ保全活動でも、高蔵寺のくらしたすけあいの会でも「後継者」につなげる課題が出されました。これに対して、谷口氏は「バズる仕掛け」を提言されましたが、引き続き取り組む重点課題です。

「一人は万人のために、万人は一人のために」の精神は、社会の課題先進地である尾張（都市部）に欠かせない「生活の知恵」として息づいていました。第 22 回東海交流フォーラムで、尾張地域懇談会からはこの二つを報告とパネル展示で紹介します。ご期待ください。（むかい しのだ）

コープみえの移動販売車！松阪の山あいに行く

三重県松阪市飯高町周辺の山あいには、冷たい冬風を切り裂いて走る一台の移動販売車があります。これは「コープみえ」が取り組む移動販売事業であり、単なる商品の提供にとどまらず、地域の高齢者にとっての「見守り」と「つどいの場」としても大きな役割を果たしています。地域と協同の研究センター三重地域懇談会として視察交流に行ってきました。



買い物困難地域に届く「食」の楽しみ

この移動販売は、近隣にスーパーがなく買い物が困難な地域を巡回しています。利用者によれば、最寄りのスーパー（マックスバリュなど）へ行くには車で片道 30 分、往復で 1 時間以上かかることも珍しくありません。さらに、高齢により運転を控えるよう家族から言われている住民の方もいて、自宅の近くまで車が来てくれることは切実な願いとなっています。

販売車には、刺身や魚、肉、野菜、パンといった生鮮食品から、電池やヘアゴムなどの日用品まで幅広く積み込まれています。特に人気なのは刺身で、利用者は「1 週間に 1 回くらいは美味しいものを贅沢して食べたい」と、量より質を重視した買い物を楽しんでいます。また、豆腐や、ドーナツ、すぐに売り切れてしまうほど人気の焼き芋など、地域に根ざした商品や季節感のある品揃えも魅力の一つです。

会話が弾む「井戸端会議」の場

移動販売の現場は、単なる決済の場ではなく、賑やかなコミュニケーションの場となっています。スタッフの石崎さんや中江さんは、利用者一人ひとりと「今日はこれが美味しいよ」「お茶漬けのりはある？」といった会話を交わしながら販売を行います。

ある利用者は、地元の偉人である映画 監督・小津安二郎の資料室を管理していることや、地域の歴史、伊勢参りの宿場町として栄えた過去、そして自

慢の「飯高茶（伊勢茶）」について熱心に語ってくれました。このように、移動販売車が来る時間は、孤立しがちな高齢者が外に出て、隣人と顔を合わせ、思い出や日常を共有する貴重なひとときとなっています。

「見守り」という重要なミッション

この事業の大きなテーマは「地域見守り」です。スタッフは、いつも来ている方が姿を見せない場合や、様子がおかしいと感じた際に、社会福祉協議会などと連携して安否確認を行う体制を整えています。行政からの直接的な金銭的支援は現時点では限られているものの、広報活動や情報の共有を通じて、地域全体で高齢者を支えるネットワークが構築されつつあります。

起点となるまつさか店の運営側には、商品の鮮度管理や天候への対応、そして採算性の確保といった課題もありますが、現場のスタッフは「地域で一番の移動販売にしたい」という熱意を持って取り組んでいます。それは競い合いというよりも地域の声を受け止めて改善し続ける決意として受け止めました。利用者からは「ずっと続けてほしい」という強い期待が寄せられており、その声が活動の原動力となっています。

結びに代えて

コープみえの移動販売車は、単に「物売る車」ではありません。それは、過疎化が進む地域において、人々の暮らしに安心と彩りを添え、コミュニティを繋ぎ止める「動く拠点」です。寒い冬の日も、暑い夏の日も、コープの看板を掲げた車がやってくることで、地域の笑顔が守られています。

（文責 駒井義明）

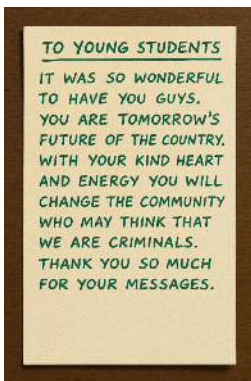


難民の方々からのメッセージと大学生の学び

現在、世界では紛争や迫害により強制移住を強いられる人たちが 1 億 2,320 万人に達しています。日本でもウクライナ避難民などを対象とした「補完的保護」による受け入れも進んでいますが、日本で暮らす難民を取り巻く環境は極めて厳しく、物価高騰が彼らの生活を直撃しています。さらに、現政権による在留資格の運用厳格化や更新手数料の大幅引き上げ案の検討など、難民を含む外国籍住民の間に大きな不安が広がっています。こうした中、研究センターが名古屋難民支援室やアジアボランティアネットワーク東海と継続している市民が支える食料支援は、単なる食料の提供を超えた重要な支えあいの場となっています。

難民の方々からのメッセージ

12 月 14 日に発送した食品や励ましのメッセージを受け取った難民の方々から温かい返信が届きました。

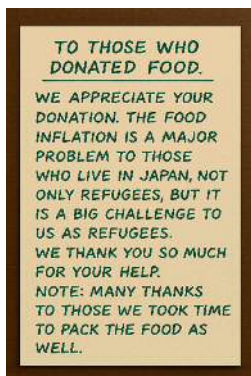


大学生に宛てたメッセージ

（若い学生の皆さんへ：皆さんとの出会いは、私にとって大きな喜びでした。あなたたちはこの国の未来です。私たちのことを犯罪者のように思う人々がいる中で、皆さんのような優しさと活力こそが、コミュニティ（社会）を変える力になります。メッセージを届けてくれて、本当にありがとう

ございます。）

食料寄付をした方、発送作業へ参加した方へ宛てたメッセージ



（食品を寄付してくださった皆様へ：ご寄付をいただき、心から感謝いたします。今、食料品の物価高騰は、難民だけでなく日本に住むすべての人にとって大きな問題となっていますが、難民である私たちにとっては、よりいっそう深刻な試練となっています。皆さんの助けに、本当に救われています。

ありがとうございます。追記：食品の箱詰め作業に時間を割いてくださった皆様にも、深く感謝いたします。）

同じ状況にある難民の方へ宛てた励ましのメッセージ

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

"Being a refugee in a country you don't know it's always hard, but when you meet a community that cares about you, It is an extra day of surviving. Be strong and do not lose hope."

（見知らぬ国で難民として生きることは、常に困難の連続です。しかし、私たちを大切に思ってくれるコミュニティ（支えてくれる人たち）に出会えたとき、それは「もう 1 日、生き延びるための力」を与えてくれます。強く生きましょう。希望を失わないでください。）

大学生の学び:寄せられた感想

名古屋外国語大学と名城大学ではボランティアの授業の一環で、難民食料支援に取り組んできました。難民の方から届いた返信から、学生たちは衝撃と共に自らの視点を見つめ直しています。

「1 人の難民の方が書いた手紙の中に「犯罪者のような扱いを受けることがあるため、自分が難民であることを言わないようにしている」という言葉があり、それを読んで私は大きな衝撃を受けました。日本人は「優しい」と言われることが多い一方で、直接言葉にしなくても、視線や独特な空気感、そして言葉にできない壁のようなものを、難民の方々が感じているのだということを初めて知りました。自分が何気なく過ごしている日常の裏側で、こうした孤独や恐怖を抱えている人がいるのだという現実に胸が締め付けられる思いでした。」

「メッセージを書くだけで、難民の方の力になれることを実感しました。なので、小さなことでも誰かの力になれることがとても嬉しかったです。」

「丁寧な返事をしてくださっていて、嬉しかった。これだけ喜んでもらえるのであれば今度は手紙だけではなくしっかりと食料も寄付したいなという気持ちになった。」

社会参加と「共に生きる」学び

食料支援を通じて学生たちは、自分たちが生きる社会への気づきや、他者への共感へと繋がっています。難民の方たちが語った「犯罪者のように見られる」という現状は、国の難民受入れ制度、私たちの無知や無意識による視線や社会構造が作り出しているものです。しかし同時に、難民の方たちが学生たちを「この国の未来」と呼び、交流の中に「もう一日生き延びる力」を見出した事実は、市民協働が持つ可能性を示しています。直接会うことはなくとも、食料やメッセージを通じて、人と人とが繋がっているということを実感する経験こそが、若者たちにとって大切な学びになっていると感じます。

制度が変わり現状が厳しくなる時ほど、地域での支えあいの重要性は増します。次回の「難民食料支援 学び語り合う会」は 2 月 23 日(月・祝)に開催します。ぜひご参加ください。（かんだ すみれ）

情報クリップ

生活協同組合研究 2026.1 VOL. 600

国外の生協事情 2026

公益財団法人 生協総合研究所 2026 年 1 月 B5 判 72 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

2 回目の国際協同組合年の成果とこれから 和田寿昭

特集 国外の生協事情 2026

イギリスの生協コープグループ事業概況

と店舗・卸売事業

天野晴元

ニューノーマル時代における韓国生協の現況と展望

李 恩静 ・ 金 亨美

スイス二大生協の近況

佐藤孝一

北欧の生協に学ぶ

ーフィンランドとデンマークの事業と理念ー

栗原奈津季

ベルギー・米国・アルゼンチンの生協の顛末と

フランスの新潮流

鈴木 岳

■IYC2025 の機会に協同組合の価値を再考する (第 10 回)

神奈川の協同組合間協同がつむぐ子どもたちの未来

三浦一浩

■国際協同組合運動史 (第 46 回)

1980 年第 27 回 ICA モスクワ大会①

鈴木 岳

■本誌特集を読んで (2025・11)

亀山俊朗

■『生活協同組合研究』通巻 501～600 号までの動向

鈴木 岳

■新刊紹介

原田小鈴／アリ・ビーザー (著) 黒住奏 (訳)

『「キノコ雲」の上と下の物語～孫たちの葛藤と軌跡』

柳下 剛

●生協総研賞 第 15 回表彰事業・選考委員講評

●公開研究会「第 7 回世界社会的連帯経済フォーラム

(GSEF) ボルドー大会の報告とその周辺 (1/27)

文化連情報 2026.1 No. 574

住民参画で地方自治を動かす

日本文化厚生農業協同組合連合会 2025 年 12 月 B5 判 72 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 * 注

新年の御挨拶

協同組合の価値が問われる時代 食と医療福祉を守り、安心の地域づくりの実践を

八木岡 努

新年の御挨拶 役員一同

新春インタビュー

住民参画で地方自治を動かす

～人口減でも地道な内発的發展で

地域社会の機能維持へ～

片山善博

考論 災害と地域づくり (4)

能登半島地震と人権・住み続ける権利

井上英夫

“協同” がよりよい世界を築く

～連続シンポジウム 座談会

暮らしを支える医療・福祉

ー足助病院 小林真哉院長が登壇

医療機関における原価計算 (上)

なぜ今厚生連病院に原価計算と

コスト意識改革が必要なのか

高瀬浩造

足助病院 赤ひげ大賞受賞記念誌

・ブランディングプロジェクト紹介誌を発行

第 50 回臨床工学部会および

第 8 回医療機器安全管理部局会議 聖隷浜松病院視察

小廻哲也

二木教授の医療時評 (239)

社会保障・医療保険の給付・負担についての意識調査ー給付減・負担支持は 1～2 割にとどまる

二木 立

もう他人事ではいられない。

介護事業者の AI・IT 戦略 ーDX から AX へ、

介護経験者が知っておきたい活用の視点

大場勝仁

地域の豊かな食と農を未来につなげよう

ー第 26 回佐久地区食と農のつどいが開催されました

農高生と地域をつくる

～我はいかにして農業高校教員となりしか～ (12)

生徒たちと羊の夢を見る

橋本 智

多様な福祉レジームと海外人材 (88)

女性ホームレスはなぜ見えにくいのか

安里和晃

全国統一献立 岐阜県の郷土料理 五平餅

松岡知恵子

臨床倫理メディエーション (86)

生きるために一生命と時間とナラティブ

中西淑美

デンマーク & 世界の地域居住 (197)

介護士のシェアリングで

介護保険サービスを提供②

松岡洋子

□書籍紹介

フランスの田舎に心ひかれて

～移住した家族の心地よいライフスタイル

▶線路は続く (200)

京都嵐山に名車を訪ねて / 西出健史

▶最近見た映画

手に魂を込め、歩いてみれば / 菅原育子

社会運動 2026.1 No. 461

「米が足りない」のなぜ

一般社団法人 市民セクター政策機構 2025 年 10 月 A5 判 144 頁 本体価格 1,100 円

FOR READERS

『米が足りない』のなぜ」を特集したのはなぜ？

・part 1 生産・流通・消費の問題点

2024 年から 2025 年のコメ不足・高騰の動きを追う

生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 常務付
山田 衛「減反政策」から「直接払い」に
明治大学農学部食料環境政策学科教授 作山 巧
生産・集荷・販売の要 JA 全農に聞く
全国農業協同組合連合会 米穀部 部長 藤井 暁
米不足と食品ロス

食品ロス問題ジャーナリスト 井出留美

・part 2 米をめぐる日本近現代

ルポ 米騒動発祥の富山を訪ねて
ライター 室田元美
穀倉地帯東北と稲作 / ライスナショナリズム
宮城教育大学教育学部准教授

山内明美

・part 3 米を自給しつづけるために
遊佐町の治水支援と米不足の中での連帯遊佐町共同開発米部会会長 今野 修
遊佐町共同開発米部会事務局長 池田恒紀
生活クラブ生活協同組合・神奈川副理事長連合消費委員長 籠島雅代
生活クラブ事業連合生活協同組合連合会常勤理事

・ビジョンフード推進部長 鶴澤義宏

食料・農業・農村基本法と基本計画への 6 生協提言

これからの活動

生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 会長
村上彰一「にぎやかな過疎」に舵を切れ
明治大学農学部食料環境政策学科教授 小田切徳美
書評 『サステナビリティの隘路』 古沢広祐
『私たちは何を捨てているのか』 村山なみ

連載

「カンパニー」を世界の言葉で 第二回
ブラジルのアマゾン流域で力持ちの日系移民に会った
作家・イラストレーター 金井真紀

韓国の社会的協同組合のいま ⑥

移住民社会的協同組合
株式会社異路 (IRO) 代表取締役 上前万由子

連載 客員研究員コラム

ボトムアップ民主主義の時代 第 8 回
新しいリベラルとは何か 政治学者 岡田一郎

ネット最前線・観測記 ⑪

鹿とデマと排外主義、その行方
外国人権法連絡会事務局次長 瀧 大知

韓国の社会的経済と政治 第 14 回

いよいよ国会提出へ社会連帯経済基本法案
京畿道議会政策支援官 崔 汎竟新連載 『韓国協同組合運動 100 年史』を巡る
連続学習会①の報告

戦後 80 年。長生炭鉱の遺骨収集

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(*)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

※『CO・OP navi』、からデジタル、そして note へ

長らく紙媒体で発行されてきました『CO・OP navi』は、2025 年 12 月号をもって紙での発行を終了し、デジタル版へ完全移行することになりました。そのメリット一つとして、より多くの人たちに届けられるよう note で発信されます。この 1 月から「プレオープン」し、デジタル版への移行作業を進めていくということです。右の QR コードから「プレオープン」の『CO・OP navi』を見ることができますので御覧ください。



書籍紹介



地域と協同の研究センター 井貝 順子会員からの書籍紹介

「普天を我が手に」第一部、第二部、第三部 著者：奥田英朗

出版社：講談社 発行：第一部 2025/6 第二部 2025/9 第三部 2025/12

価格：各 2,695 円(消費税込)

主人公は大正天皇崩御が伝えられた 1926 年 12 月 25 日未明から同 31 日まで、実質 7 日しかなかった昭和元年生まれの 4 人。東京は麹町在住の陸軍士官を父に持つ〈竹田志郎〉と、生後すぐに女工の母親が死に、金沢の侠客に引き取られた〈矢野四郎〉。さらに神保町「群青社」の女性編集者と妻子ある左翼活動家の間に生まれた〈森村ノラ〉、大連で楽団を率いるジャズマンの息子〈五十嵐満〉という、育った環境も立場もまるで異なる 4 人の人生が交錯する時、世界の元号で最も長く、変化も激しかった時代が丸ごと見えてくる昭和史サーガ。足かけ 64 年に亘る激動の昭和史を愛すべき彼らの群像劇として読ませて飽きさせず、読み終えるのが惜しいほど。

作者の奥田氏は語る「東京大空襲のことは一度ちゃんと書きたかったし、大連にも取材に行きました。最近の政治家は誰も満州の話をしたが

らないけど、当時の人が大陸に夢を見たのは確かで、その夢ごとないことにされるなら触れないわけにいかないと思って。一方で満蒙開拓の名の下に 500 万人規模の棄民政策が行なわれ、他にも北朝鮮の帰国事業とか公害問題とか、酷いこともたくさんあったのが昭和で、そこは誰かが書いておかなきゃなって」「今は平成元年生まれでも 35、36 でしょ。戦争は当然知らないし、現代日本人は下手するとルーツを見失いかけているんじゃないかって。僕らの頃も現代史の授業はほぼなくて、張作霖爆殺は事変で朝鮮戦争は動乱とか、教科書が逃げていることも後々本を読んでわかった。実は今も三億円事件の小説を連載中で、司馬遼太郎さんは明治を書いたことだし、自分は昭和を書こうって」

昭和の真ん中あたりに生まれた私。大正 15 年 8 月生まれの亡き父を思いながら読みました。第 3 部のモデルとなった実在の人物たちを想像するのはたやすい作業でした。この国の成長と成熟を体感し、これからどうなっていくのだろう・・・という漠然とした不安を感じつつ生きている私にとって、長引く戦争にもくじけることなく、終戦後の復興を支え、たくましく新しい時代を切り開いていく彼らの姿は、私に圧倒的な勇気と感動を与えてくれました。金沢の侠客ヤノタツ（矢野四郎の養父）が、素敵すぎです。

研究センター1 月活動の報告

- 6 日（火）名城大学ボランティア入門⑤
- 8 日（木）三河地域懇談会世話人会
- 14 日（水）常任理事会
- 17 日（土）生協職員マイスターコース第 6 回
- 19 日（月）尾張地域懇談会世話人会 岐阜地域懇談会世話人会
- 20 日（火）三重大学「協同組合論」
- 22 日（木）組合員理事ゼミナール第 8 回
- 25 日（日）サードセクター研究会
- 31 日（土）友愛協同セミナー、協同の未来塾第 7 回

※企画は様々な事情で中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターの情報

下記 QR コードからご覧ください。

ホームページ



facebook



Instagram

